

# 戦後日本における海外短波放送のリスナー

井 川 充 雄

## 一 はじめに

筆者は、これまでいくつかの論文で、冷戦期におけるVOA (Voice of America) による日本・朝鮮半島向けのプロパガンダ放送を取り上げ、アメリカの「広報外交」(Public Diplomacy) の一つとしてのラジオ放送の役割を論じてきた。論文「朝鮮戦争におけるアメリカのプロパガンダ放送とNHK」は朝鮮戦争期におけるプロパガンダを、論文「戦後VOA日本語放送の再開」では日本向けの「広報外交」の様態を、主としてアメリカの公文書によって明らかにした。また、「VOAフォーラム―「教養番組」とプロパガンダの交差するところ」では、VOAが全世界向けに放送した教養番組の内容と意図を論じた。他方で、「冷戦期に

におけるVOAのリスナー調査 ―日本語放送を例に―」では、そうしたVOAの放送がリスナー調査を伴っており、より効果をあげるように調査技法そのものも改善されてきた過程を明らかにした。これらは、主に送り手の視点から冷戦期のラジオによるプロパガンダにアプローチしたものである<sup>1</sup>。では、この当時、そうしたラジオ放送はどのように聴取されていたのであろうか。

一般に、メディア史研究において受け手研究は、その重要性が十分に認識されながらも、なかなか進まない分野である。それは、そもそも「受け手」とは何者かを確定することが難しく、また「受け手」は一般に分散して存在しているため、その様態を実証的に明らかにすることには資料的な制約があったからだと言える。本稿では、一般の読者

を対象として出版された書籍や雑誌などの活字媒体で海外短波放送がどのように表象されてきたかを分析することを通して、海外短波放送のリスナーたちがどのような人々で、彼らは何を求めて、海外短波放送の受信に夢中になっていったのかについて考察したい。そして、海外短波放送の受信が、趣味として確立する過程の一端を明らかにしたい。なお、一九七〇年代から八〇年代初めにかけて、いわゆるBCLブームがわき上がるが、それについては別稿を期することとし、本項はその前段とも言える戦後すぐから一九六〇年代までの日本を対象とする。

## 二 寺澤春潮の「太郎」シリーズ

日本では、大正期以降、ラジオに関係する雑誌がいくつが存在した。その一つが一九二四年五月に無線實驗社から創刊された『無線と實驗』である。この年は、日本におけるラジオ放送開始前年にあたり、ラジオ熱が高まっていた時期である。高橋雄造によると、その後、同誌は、小川菊松の誠文堂書店に買取され、自作ラジオファンのための雑誌としての性格を強めていった<sup>2</sup>。ちなみに、同誌は、現在も後継の誠文堂新光社から『MJ 無線と実験』として刊行されている。実に九〇年も続く老舗雑誌である。

さらに敗戦後、さまざまな出版物が堰を切ったように刊行されるが、その中にラジオに関連する雑誌も少なくなかった。それは、『電波科學』（一九四六年四月復刊、日本放送出版協会）、『ラチオアマチュア』（一九四六年五月創刊、科学出版社）、『ラジオ技術』（一九四七年四月創刊、科学社）、『初歩のラジオ』（一九四七年九月創刊、誠文堂）とそこから派生した『ラジオの製作』、『ラジオと実験』（一九四九年四月創刊、鳳文書林）など、枚挙にいとまない。このうち、『無線と實驗』と『ラジオ技術』は上級ファン向けの高レベルであったのに対し、『初歩のラジオ』や『ラジオの製作』は、初歩向けジュニア版であったという<sup>3</sup>。『ラジオの製作』は、表紙に「だれでもできる」との副題がつけられているが、まさにその名前が示すとおり、初心者向けであった。

これらラジオ関係の雑誌は、最初の中波放送を聞くための受信機の製作からスタートしたが、すぐにその関心は短波無線の送受信にも向けられていった<sup>4</sup>。

この時期の図書では、寺澤春潮の「太郎」シリーズが目を引き、寺澤春潮（本名・通恭）は、戦中期に『無線と実験』の編集長を務めた人物である。終戦前に誠文堂書店を退社して、執筆活動を行っていた。戦後は、『受信用真空管

便覧』などの技術書を著すかたわら、日本ラジオ技術協会を設立し、講習会などを開催したという<sup>5)</sup>。

寺澤は、戦後すぐに『太郎のラジオ実験讀本』と題する三分冊の本を刊行する。これは、ラジオについて何も知らない中学一年生の太郎が、先生役の兄から教えてもらおうという形式で、電気やラジオの原理を教わり、最後には電蓄兼用の交流式五球受信機の作り方を学ぶというものである。寺澤が小川菊松の思い出を回顧した文章によれば、一九四七年八月に小川が来訪し、「君の書いた『太郎のラジオ』だが、どうしたわけかよく売れるよ」と言われ、さらに「そこでこの際、もう一つ書かないかね。初版2万部出してあげるよ。」などと言われたという。実際、『太郎のラジオ実験讀本』は、一九四六年一月に増補合冊して、再刊されている。なお、同書の版元は牛込書房となっているが、住所は誠文堂ビル内となっており、戦争責任の追及を懸念した誠文堂が別途設立した会社であったようだ<sup>6)</sup>。国立国会図書館のOPACで検索すると、牛込書房の発行した図書は、この『太郎のラジオ実験讀本』と後述の『太郎の短波ラジオ実験』の二点しかない。

さて、小川の勧めで寺澤が一九四七年に著したのが、その姉妹編の『太郎の短波ラジオ実験』である。これも前著

と同様で、太郎が兄に教わりながら、真空管を使った短波ラジオを組み立てていくという内容である。全般的には、技術を解説した書物であるが、序として、以下のように刊行の意図が述べられている。

諸君もご存じでしょうが終戦前、わが國では短波の聴取は一般に禁じられていました。電波の鎖國でですね。このため世界の動きや世界の輿論をありのままに知つて、わが國の立場を正しく判断することができませんでした。このことが、無理な戦争に突入した大きな原因であります。

短波の聴取が禁じられていたため、優秀な全波受信機に對する需要がありませんでした。それがため、このような受信機を作る技術が全くといつてよいほどありませんでした。このことがいい電波兵器のできなかつた大きな原因であります。

しかし、終戦になってから短波の聴取が解禁になつて世界の聲、世界の音楽を自由に聴けるようになりました。短波というと何だか近寄りがたいもののように思ふ人もありますが、別にむづかしいものではありません。普通の受信機に僅か手を加えただけでも聴くこ

とはできません。しかしながら、短波の技術は随分奥行  
がありますから、いくらでも勉強の種はあります。

これと同趣旨のことは、本文中でも「二 短波の聴取を  
禁じた國が敗けた」、「三 対日放送と短波放送」の計一五  
ページを使って、太郎と兄との会話形式で詳しく説明して  
いる。つまり、戦中、海外からの情報をシャットアウトし、  
日本政府や大本營の発表のみを鵜呑みにしていたことを反  
省し、海外からの放送を積極的に受信すべきであるという  
ことである。本文には次のような一文も書かれている。「各  
國の対日放送は今もなお續けられていますし、語學の勉強  
をすれば、あとは短波受信機か全波受信機があれば世界の  
新しいニュースを知ることができます。私共はぜひ短波か  
全波受信機を作つて世界の聲に傾聴し、それをよく吟味し  
理解して進まないといけません」。ここに筆者の意図は端  
的に表れている。

この『太郎の短波ラジオ実験』の最後では、太郎が学校  
の友人たちと「双葉ラジオ・グループ」という会を作り、  
メンバーがそれぞれ研究発表をしながら理解を深めていく  
という場面が描かれている。これは、後述のリスナーの  
サークル組織の原型をなすものと言えよう。おそらく、こ

うした自発的なサークルは、すでに多数生まれており、ま  
た筆者もそうした活動を奨励する意図で、最後にこれを書  
き入れたのであろう。

なお、寺澤は、このあとも『太郎のラジオ技術講座』『太  
郎のラジオ技術読本』を著しているが、これらの版元は大  
盛社となっている。これは、誠文堂や牛込書房とは直接の  
関係はなかったが、「大盛社の『太郎』という書名は、誠文  
堂で出した『太郎もの』がよく売れるので、うちでも『太  
郎』と付けたいという申し出による」<sup>10</sup>と寺澤は書いてい  
る。それだけ、太郎シリーズは、電波やラジオの入門書と  
してよく売れたのであろう。

### 三 一九五〇年代から六〇年代の「短波マニア」

ところで、第二次世界大戦が終わると世界は冷戦体制へ  
と移行し、米ソ両国ともますます心理戦を重視するようにな  
った。そのため、短波を用いた国際的なラジオ放送も、  
プロパガンダの手段として重用された。トルーマン政権下  
で国際情報政策の見直しが行われたのに続き、一九五三年  
に発足したアイゼンハワー政権は、同年八月、国務省から  
国際広報部門を独立させ、U S I A (United States  
Information Agency) を設立し、国際放送のVOAなどを

そこへ移し、いっそうの拡充を図った<sup>11)</sup>。

このように海外短波放送は、東西両陣営によって冷戦の武器として用いられた。したがって、例えば、次に紹介する『朝日新聞』の一九五七年七月二八日の夕刊に掲載された記事でも、海外短波放送は、基本的にはそうしたトーンで紹介されている。すなわち、その「それぞれの色彩 海外からの日本語放送 政策宣伝に趣向こらす」という記事は、冒頭で、「短波受信熱はいま、かなり盛んのように。世界各地と自由に交信するハムには及ばないとしても、海外の放送をじかにきけるという国際的なおいがよろこばれるものらしい」とした上で、「海外放送の目的は、結局自国の政策を宣伝することにある」、「最近妨害電波が激しくなり」、「海外放送は政策宣伝合戦の場である」などと、短波放送が各国のプロパガンダの手段として使われていることを説明している。しかし、記事の末尾には、「なお、日本向け放送をきく短波受信機は、21メガから8メガぐらいまで、幅広く周波をつかめるものが多い。共産圏からの中波放送は、ふつうのラジオでも、分離の性能がよければきける。アンテナ、アースを完全にすることが大切。放送をきいて、感度、受信状態をしらせてやると、各放送局とも番組のパンフレット、Q S S L (受信証) をおくってくれる」

とし、受信の仕方やベリカードにも言及している<sup>12)</sup>。したがって、すでに海外短波放送を聞くことが、趣味としてもある程度広まっていたことが推測できるである。

次の一九五九年八月一六日号の『朝日ジャーナル』の記事も、それを裏付ける。この記事では、「海外放送の起りは、イギリスが世界各地に散在する自国の植民地に住むイギリス人に、本国のニュースを伝えることにあったが、国際関係が複雑化するにつれて性格が変化し、現在では、各国とも自国の政治的立場、文化を理解させる宣伝的要素が多くなってきた」とした上で、VOAについては「どことなくそっけなく、官僚的で、モスクワ放送のような流動感に欠けている。国務省の監督が強すぎるからではないかというわさもある」、北京放送については「日本批判は激しく、時にはひどい悪口で、とてもニュースには使えない表現もある」などと各国の日本向け放送を評し、「日本では外国の日本語放送をきく人は一部の短波ファンに限られていたが、最近、受信機は短波帯を備えた二バンドのものがふえてきたので、これらの放送をきく人も次第にふえてくることだろう」と結んでいる<sup>13)</sup>。これらの記事を見る限り、一九五〇年代においては、海外短波放送は東西両陣営からのプロパガンダのメディアというのが基本的な位置づ

けで、趣味としての短波放送の受信は、ごく限られた範囲内で行われていたにすぎなかった。

ところで、趣味として海外短波放送を聞くリスナーの存在は、リスナーのサークル組織という形態で確認することができる。

送り手側のVOAも、それを把握しており、一九五二年下半期の国務省のレポートも、「日本には九つの短波リスナーの組織があり、それらはおよそ五〇〇〇人（その多くは学生）のメンバーがいるとしている」<sup>14</sup>と記している。

そうしたリスナー組織の一つに、日本短波クラブ（JSCWC）がある。これは、一九五二年に創立という老舗のリスナー組織である。その創立の経緯について、同クラブの『創立50周年記念誌』は、次のように説明している。

第二次大戦中、海外情報を直接入手できる短波放送の受信は禁止されていたが、戦後その解禁とともに、米軍の軍用余剰品（ジャンク）や解体された日本軍の無線機、そしてその部品を利用したラジオ作りが、科学心のある青少年たちの大きな遊びの場になった。自作の受信機を使った海外短波受信は、その遠隔性（DX）が競われ、無線雑誌も、この潮流を大いに刺激し

た。

そんな中、仙台の学生たちの中から、外国のラジオ・クラブに負けない日本のクラブを作ろうと出来たのがこのクラブである。当初から国際クラブを目指したJSCWCは、月刊の会誌を英文で作成し、広く海外の会員を集めた。クラブ本部のある仙台市にはクラブ創立当時まだ米軍基地があり、米軍放送のFENもあったそんな時代であった。しかし、意気軒昂なクラブの創立者たちは、どんどん海外に宣伝し、初年度から海外の数カ国の放送局からクラブ向けの特別放送を実施してもらい、一年余で会員も一〇カ国から一〇〇名という大台に乗せ、以後着実に成長して行った<sup>15</sup>。

日本短波クラブを発起した小川昭も和田謙郎も、当時、東北大学工学部通信工学科の学生であった。彼らは、『無線と実験』、『ラジオ技術』といった雑誌からいろいろな情報を吸収し、自分でラジオを組み立て海外からの微弱な電波を夜ごと探し求めた。設立時の会員は約二〇名で、会員間の情報交換のために、一九五二年七月には機関誌の準備号を、九月には第一号を発行した。機関誌は、当初、全体が英文であったというだけに、かなりの専門的知識を持った

人達の集まりであったと思われる。翌年には国内の会員向けに日本語版の作成も開始した<sup>16</sup>。このように、この時期の海外短波放送のリスナーは、メカに強く、自分でラジオを組み立てたり、アンテナを張るなどして、海外からの放送をキャッチした。

そうした光景は、ノンフィクション作家の山根一眞の回想にも描かれている。

中学生になってからは、音楽鑑賞と同時に短波放送受信にも凝り出した。秋葉原で短波放送用のコイルを手に入れ5球スーパーラジオを改造し短波放送聴取に挑戦。だがこのラジオ、当然短波用ダイヤル盤がない。ないと不便なので、選局ダイヤルを回し入感した雑音混じりの微弱海外放送を全身の神経を集中して聴き、番組の狭間でアナウンスされる放送局名と周波数を頼りにダイヤル目盛りを自分で刻んでいったのです。やがて深夜に北朝鮮が日本潜伏スパイ向けに放送する乱数表による暗号を受信し楽しむようにもなった。こんなふうには、庭の木に張り渡した長さ20メートルのロングワイヤーアンテナが捉える海の向こうの世界から届く短波放送を聴く興奮は、ネットサーフィン興奮の古

代版でしたね。

高校生になって憧れのオールウェーブ短波受信機『9R59』の組み立てキット（トリオ製、現・ケンウッド）を入手し作り上げ、新潟地震の緊急災害通信に貢献したりもした。こういうエレクトロニクス好き（「ラジオ少年」と呼ばれた）はオーディオ系と無線系に分派するが、私は両方好きだった<sup>17</sup>。

著者の山根一眞は、一九四七年一〇月、東京生まれである。文中の新潟地震は一九六四年六月一六日に発生したので、山根が一六歳の時の出来事ということになる。山根によって生き生きと描写されているのも、一九六〇年代初頭に、みずからラジオを組み立て、アンテナを工夫して張った少年時代であった。

このように、一九五〇年代から六〇年代にかけての海外短波放送の聴取は、電波や電器に関する技術系の雑誌から情報を得て、ラジオ受信機のみずから製作したり、アンテナを張ったりしながら、海外からの電波を受信する「短波マニア」だった。彼らの多くは、アマチュア無線も並行して行ったし、山根の回想の最後にあるように、オーディオにも興味を持つものが少なくなかった。そして、彼らの楽

しみを支える拠点として、東京・秋葉原のような電気街があったことも見逃せない<sup>18</sup>。

彼らにとつてのそもその楽しみは、自らが苦心して組み立てたラジオによつて、内容の如何に関わらず、外国からの電波をキャッチできるということにあったのだろう。中波のラジオなら、国産のラジオが数多く生産・販売されており、ラジオから音が出ること自体は何ら特別な経験ではない。しかし、短波となると、国内では日本短波放送に限られ、また市販の受信機も限られていた。そうしたなか、市販の受信機を改良したり、自分でラジオを組み立てたりして、そのラジオが外国の放送をキャッチすること自体が、大きな喜びをもたらしたのだと言える。したがつて、極端な言い方をすれば、彼らが聴きたかったのはラジオ放送の本身そのものというよりは、その放送局を同定するためのコールサインだったのである。

#### 四 おわりに

以上、戦後すぐから一九六〇年代までの日本における海外短波放送のリスナー像を当時の文献の記述からたどつてきた。

ここで、指摘できるのは、戦前の「ラジオアマチュア」

との直接の結びつきである。ラジオ放送は突然始まったわけではなく、「ラジオアマチュア」の存在がそれを先導したことが、今日さまざまな研究によつて明らかにされている<sup>19</sup>。こうしたアマチュアが先導するという普及のパターンは、その後も、マイコンブーム→パソコンの普及→パソコン通信→インターネットの普及、という際にも見られるもので、ロジャースの「技術革新の普及過程」モデルとも通じるものと考えられる。

日本においては大正期にアマチュアラジオ文化が勃興し、それが日本のラジオ放送の先導者となった。そして、その媒体となったのは、『無線と実験』などの雑誌メディアであった。その後、関東大震災を契機として、社団法人東京放送局など三つの放送局に結実していく。しかしながら、その後は、国家事業と位置づけられ、放送事業は日本放送協会により独占的に行われることになる。さらに戦時体制の強化と相まって、受信機さえも「放送局型受信機」に画一化されてしまう。さらに戦争は、海外からの放送の受信をも禁止させてしまった。こうして、日本のアマチュアラジオ文化は、いったんは潰えてしまったかのように見える。

けれども、敗戦によつて、アマチュアラジオ文化は、再

び覚醒することになる。それを端的に物語るのは、乱立とも言える戦後のラジオ関係の雑誌の出版ラッシュであった。そのなかで、戦前からのアマチュアラジオ文化との関係を体現したのは、寺澤春潮らであった。寺澤は、『無線と實驗』の元編集長として、まさに戦前と戦後のアマチュアラジオ文化をつなぐ役割を果たす。彼は、中学一年生（ちょうど学制改革により旧制から新制に切り替わる時期であったが、いずれにせよ一三歳程度）にわかるように、ラジオの原理や海外からの放送の受信方法を説明することによって、次の世代のアマチュアラジオ文化を育成しようと試みたのである。（ただし、本の内容は高度で、本当に中学一年生がすべてを理解できたかはわからないし、本の購入者ももっと年長ではないかと推察される。）

そして、一九五〇年代に入ると、日本短波クラブをはじめとするいくつかのリスナー組織が生まれ、活動を開始する。電波や電器に関する技術に精通し、自作のラジオで海外からの電波を受信する「短波マニア」の登場である。彼らは、海外からの電波を自作の機器でキャッチすることに傾注する人びとであった。むろん、この時代に、政府や報道機関に所屬して仕事の必要から受信していた人もいたし、語学の習得など別の目的から短波放送を聴いていた人

もいたのは間違いないが、海外からの短波放送を受信することが、ひとつの趣味として確立していったのである。

ただ、それは放送の送り手が想定していたような国民全般を網羅するものではなかった。あくまで、理系の才があつてメカに強い人びとである。そして、重要なのは、それがおそらくは男子に偏っていたということである。寺澤の「太郎」シリーズも、まさしく主人公は男の子であり、読者もおそらくは男子を想定したのだと思われる。山根の言うのも「ラジオ少年」であり、「ラジオ少女」は一般にはほとんど存在しなかつたのである。実際、VOAが一九五〇年一月に、全世界を対象として行った英語トランジスタ・コンテスト(The Worldwide English Transistor Contest)には日本からは六一一通の応募があつたが、その内訳は、性別では男性が八七%、年齢階層では二〇歳代四七%、三〇歳代二二%、職業では学生三九%、専門職二九%などが上位を占めていた<sup>20</sup>。こうして、短波放送の受信は、アマチュア無線やオーディオ好きなど、近接する趣味の領域と同様に、比較的若い男子の趣味として確立していったのである<sup>21</sup>。

#### 【注】

1 井川充雄「朝鮮戦争におけるアメリカのプロパガンダ放送とN

- HK」『マス・コミュニケーション研究』六〇号、日本マス・コミュニケーション学会、二〇〇二年。井川充雄「戦後VOA日本語放送の再開」『メディア史研究』一二号、メディア史研究会、二〇〇二年。井川充雄「VOAフォーラム―「教養番組」とプロパガンダの交差するところ」土屋由香・吉見俊哉編『占領する眼・占領する声 CIE/USIS映画とVOAラジオ』東京大学出版会、二〇〇二年。井川充雄「冷戦期におけるVOAのリスナー調査―日本語放送を例に―」『応用社会学研究』五一号、立教大学社会学部、二〇〇九年。
- 2 高橋雄造『ラジオの歴史 工作の〈文化〉と電子工業のあゆみ』法政大学出版局、二〇一一年、四九〜五九頁。
- 3 同書、六一〜六八頁
- 4 本稿の対象である海外短波放送の受信と近接するものとして、アマチュア無線がある。日本におけるアマチュア無線は、ラジオ放送開始と同時に一九二〇年代に始まり、一九二六年六月には日本アマチュア無線連盟(JARL)が設立される。しかし、一九四一年二月八日の太平洋戦争開始とともに使用停止命令が発令されてしまう。戦後、再開運動が展開され、一九四六年にはJARL機関誌として『CQ ham radio』も創刊されたが、通信内容の検閲の困難や朝鮮戦争の勃発などの理由にGHQはなかなか再開を認めず、一九五二年ようやく再開された。詳しくは、日本アマチュア無線連盟編『アマチュア無線のあゆみ 日本アマチュア無線連盟五〇年史』(CQ出版、一九七六年)、および芳野超夫「日本のアマチュア通信の歴史と世界の現状」(『B-plus』電子情報通信学会通信ソサイエティ、二三号、二〇一二年、一七四〜一八〇ページ)を参照。
- 5 寺澤春潮(通恭)『ランダム回想』寺澤春潮(自費出版)、一九八六年。
- 6 同書、二〇頁。
- 7 同書、八四〜八五頁。
- 8 寺澤春潮『太郎の短波ラジオ実験』牛込書房、一九四七年、一〜二頁。
- 9 同書、一八〜一九頁。
- 10 寺澤春潮(通恭)『ランダム回想』寺澤春潮、一九八六年、一〇九頁。
- 11 VOAの略史については、土屋由香・吉見俊哉・井川充雄「総論 文化冷戦と戦後日本 CIE/USIS映画とVOAラジオ」(土屋由香・吉見俊哉編『占領する眼・占領する声 CIE/USIS映画とVOAラジオ』東京大学出版会、二〇一二年)の筆者担当部分を参照。
- 12 『朝日新聞』一九五七年七月二十八日夕刊、四面。
- 13 「日本向けの海外放送の特色と性格」『朝日ジャーナル』一九五九年八月一六日号、三九頁。
- 14 DS Box: 2535, File 1, 511.94/1-2353, "Semi-annual evaluation report", 1953.1.23, National Archives at College Park, Maryland (以下 NAQP と略記)。

- 15 『日本短波クラブ創立50周年記念誌』日本短波クラブ50周年記念事業推進委員会、二〇〇二年、まえがき。
- 16 同書。
- 17 山根一眞「スーパー書齋の遊戯術 第41回」『DIME』一九九八年三月五日、四四頁。
- 18 多くの論者が「アキハバラ」論を展開しているが、秋葉原の街としての変遷を描いたものとして、例えば、森川嘉一郎『趣都の誕生 萌える都市アキハバラ』増補版（幻冬舎、二〇〇八年）を参照。
- 19 アメリカにおける「ラジオアマチュア」については、水越伸『メディアの生成 アメリカ・ラジオの動態史』（同文館出版、一九九三年）や、吉見俊哉『「声」の資本主義 電話・ラジオ・蓄音機の社会史』（講談社、一九九五年）を参照。日本については、デボラ・R・ポスカンザー「無線マニアからオーディエンスへ」（水越伸責任編集『二〇世紀のメディア 1 エレクトリック・メディアの近代』ジャストシステム、一九九六年）などを参照。
- 20 “VOA Worldwide English I: Operation Transistor”, 1960.1, USIA RG306, SREP S-1-60, NACP.
- 21 こうした趣味の分野における「男らしさ」については、宮台真司・辻泉・岡井崇之編『男らしさ』の快樂 ポピュラー文化からみたその実態』（勁草書房、二〇〇九年）が参考になる。

（立教大学社会学部教授）